岐阜経済大学論集 29 巻 3 号（1995 年）

現代ストーリーマンガの成立 (4)

――手塚治虫の「文法」――

榊　原　英　城

はじめに
第1章　手塚治虫 1992　……（4節途中まで第27巻第1号）
第2章　手塚治虫 1942　……（1節途中まで第27巻第2号，
　　1節末尾まで第27巻第4号）
第3章　手塚治虫 1994　……（2章2節と3章1節，本号）

第2章　手塚治虫 1942〔承　前〕

2

本稿第2章は手塚治虫の習作期を扱う予定であった。まず前節で私家版『ロスト・ワールド』その他の習作が描かれた時期の特定を試み，ついで，不二書房版『ロスト・ワールド』との比較，また，習作に影響を与えたと思われる昭和初期のマンガ家のストーリーマンガ（大城のぼる『火星探険』など復刻されている作品）との比較を「文法」という観点から行うつもりであった。ところが，前節で長々と見てきた私家版『ロスト・ワールド』の描かれた時期について再度確認する必要が生じた。次章「手塚治虫 1994」で触れる予定の手塚治虫をめぐる近況とも絡んでくる内容であるが，この節で扱うこととし，第2章の3節以下は未発表の資料も取り入れたいため，後回しにしたい。

なぜ私家版『ロスト・ワールド』の執筆時期にそれほどこだわるのか。その理由の一つは，初期B6赤本を一連の流れとして見ると，不二書房版『ロスト・ワールド』が出版された昭和23年（1948）頃までのB6作品群は描き版のものが多いため，手塚治虫の絵が作品ごとに少しずつ変ってゆき，巧くなってゆく様子が正確には捉えきれないこと。特に，不二書房版『ロスト・ワールド』の前に描かれた『地底国の怪人』のプロローグが際立って斬新であり，『ロスト・ワールド』の冒頭はそれに較べると平凡に見えること。このことは，不二書房版が私家版『ロスト・ワールド』をそのまま引き摺っているためと考えられ，二つの『ロスト・ワールド』が描かれた時期の間隔の短かさを示しているように思われる。つまり，不二書房版『ロスト・ワールド』は私家版『ロスト・ワールド』の子どもマンガ向け改版という印象が強いのだ。もう一つには，なぜ私家版『ロスト・ワールド』の執筆時期が曖昧にされているのか，理由が分らないことである。習作群のなかで，完結した長編ストーリーマンガとして最も重要な作品であるはずなのに，そして手塚治虫生前に公刊されているのに，なぜか正確な時期が特定されず，それどころか故意に曖昧にされているのではないかと疑われるのである。

1994年4月25日に，宝塚市立手塚治虫記念館がオープンした。「自然豊かな街・宝塚で育まれた手塚治虫の偉業を顕彰し，未来を担う青少年に夢と希望を伝える施設として〔……〕建設」[1]されたこの記念館について，かれこれ言う気はない……が，手塚治虫を神格化しようと意図しながら，却って矮小化する結果になってしまう幾多の言説の延長線上に，多分この記念館も位置することになるのだろうという不安を私は持った。

さて，記念館のオープンに合わせて，一冊の手塚論が刊行された。中野晴行氏による『手塚治虫のタカラヅカ』[2]がそれである。中野氏はそれ以前に，1993年2月，『手塚治虫と路地裏のマンガたち』を発表している[3]。その著書は手塚治虫デビューの頃の大阪のマンガ界，赤本の世界を描き，とりわけ『新宝島』の忘れられた原作者酒井七馬について詳しく調べた労作であった。

氏の第2作『手塚治虫のタカラヅカ』は「手塚治虫を育てたもの，手塚マンガの原点にあるものを，ふるさと宝塚とその周辺からさぐってみようという試み」[4]であると明言され，叙述の中心もそうなっているが，ところどころで触れられる初期習作群について余りにおおまかすぎるように思われる。この著書が「企画協力　手塚プロダクション」と記載されているからには，事実関係はもっと正確であっていいはずだ。習作群に触れた部分で疑問のある箇所を抜き出してみる。

「昭和一七年頃，治は『バリトン工場事件』という習作を描いている。〔……〕」[5]

「あまり観ることの出来なくなってしまった舞台や映画の世界を，紙の上に自分で再現しようという作業がストーリーマンガの萌芽だったのではないか。／中学生になった頃から治は精力的にマンガの習作を描き始めているのだ。先に紹介した『バリトン工場事件』のほか『昆虫戦線記』『幽霊男』『おやじ探偵』，のちにSF三部作として初期の傑作のひとつに数えられる『ロスト・ワールド』のオリジナル版などが，中学時代の代表作だ。オリジナル『ロスト・ワールド』の冒頭には「これは漫画に非ず小説にも非ず」というコメントが早くも登場する。〔……〕」[6]

同じページに次の記述がある。

「〔……〕『手塚治虫大全1』〔……〕に収録された「思い出の日記」には昭和二〇年（1945）四月二十五日の記事として，こんな記録もある。／「朝，『幽霊男』を執筆していると〔……〕」」

中野氏は『幽霊男』『ロスト・ワールド』を中学時代の習作のなかに含めている。『幽霊男』については同じページに記述の矛盾がある。なぜ初期習作群のことになると，手塚治虫の文章や言葉だけでなく，手塚プロダクションの関わった文章まで曖昧になるのか。

手塚治虫記念館には常設展示として，これらの習作の一部が展示されている。中野晴行氏と森晴路氏によって編集された『宝塚市立手塚治虫記念館図

録』の「常設展示作品一覧」の該当部分を引き写してみる。

6　萌芽（中学生時代2）

6-1 「オヤヂ探偵」	肉筆ノート
6-2 「バリトン工場事件」	肉筆本
6-3 「ヒゲオヤヂ南方線戦記」	肉筆ノート
6-4 「勝利の日まで」	肉筆ノート
6-5 「幽霊男」前編	肉筆本
6-6 「ロスト・ワールド〔前世紀〕」(1)	肉筆本
6-7 「おやじの宝島」	肉筆原稿

『ロスト・ワールド』は中学生時代の習作として展示されている。展示されているのは私家版『ロスト・ワールド』の元本であると思われる。なぜ中学生時代の習作として展示してあるのか。納得できない。奥付があって執筆時期が特定できるのだろうか。

更に，1994年12月と1995年1月，私家版『ロスト・ワールド』が1993年から刊行中の第4期手塚治虫漫画全集に収録され，『ロストワールド ――私家版――』（全2巻）として出版された[7]。元版3巻が2巻になり，前節で引用した元版第3巻のあとがきが，そのまま全集版第2巻の末尾に「あとがきにかえて」と題して掲載してある。（旧漢字新漢字混淆，かなづかいも怪しげな文章も殆ど直してないままである。こういうことを恥の上塗りというのだろうが，原文に忠実のつもりかもしれぬ。これも不可解。）従って，1995年1月に，1982年に出版された私家版のあとがきの記述を追認したことになる。問題の箇所を全集版に拠って再度引用しておく。「この「ロストワールド」私家版は，ぼくが北野中學二,三年の頃に書いたもので〔……〕」「「ロストワールド」はこのあと昭和十八年から十九年にかけて，四百ページほどの大冊で改定版を書いてゐます。これは今思い出してもこの第一號よりもかなり繪が進歩しており，本當はこちらの方を復刻したかったのです。内容も映畫的手法をふんだんに入れてスピーディになってゐます。所がこの第二號は，學校の友人に貸したま

ま，行方不明なのです。」

習作群の執筆時期を整理し直しておこう。

五十嵐正克氏の「前期手塚治虫劇場」という文章[8]に付された「手塚治虫略年表」の記述が最も網羅的なので，関連する部分だけを抜き出してみる[9]。

昭和16年（1941）12歳
◆大阪府立北野中学校に入学
？　**昆虫戦線記**　？
？　**昆虫の身の上ばなし**　？
昭和17年（1942）13歳
？　**オヤヂ探偵**　？　初のペン画
？　**ヒゲオヤヂのバリトン工場事件**　？
昭和18年（1943）14歳
？　**オヤヂの南海海戦記**　B6？
？　**ロストワールド**　B6？
？　**オヤヂの勤労奉仕**　4p.　昆蟲の世界・3号　？
昭和19年（1944）15歳
？　**勝利の日まで**　？
？　**桃太郎**　大政翼賛会　？　初単行本
昭和20年（1945）16歳
4月　◆大阪大学付属医学専門部に入学
4月　**桃太郎・海の神兵もどき**（未完）
8月21日　**恐怖菌**（未完）　てづかそうしょ1？（私家版）　B6
？　**幽霊男**　てづかそうしょ2？（私家版）　B6？
？　**おやじの宝島**　てづかそうしょ3？（私家版）　B6？
昭和21年（1946）17歳
1月4日→　マアチャンの日記帳　小国民新聞　→3月31日
4月15日→　珍念と京ちゃん　京都日日新聞　→？
7月20日→　AちゃんB子ちゃん探険記　小国民新聞　→8月3日
8月　**ロスト・ワールド**　前編　中編　後編　てづかそうしょ4〜6（私家版）
B6　424p.〔……〕復刻版解説だと戦前？

8月　**ロマンス島**（未完）　てづかそうしょ7？（私家版）　B6
10月21日→　**ロスト・ワールド**　関西與論新聞　→？　8コマ　連載

『ロスト・ワールド』は中学生時代の習作でなければならない何らかの理由があるのだろうか。あるとすれば，それは手塚治虫が私家版あとがきにそう明記したから，というほか考えられない。手塚治虫が何かの事情で間違ったことを書いた，それを間違いと認めるのは具合が悪いのだろう。

多分，『ロスト・ワールド』は（アイディアがいつできたのかは別にして）私家本として描かれたのは1回だけ，それもデビュー後，昭和21年（1946）夏と推定するのが妥当なようだ。従って，前節の「手塚治虫展」の年譜による順序が正確だと考えられる。そうならば，長編ストーリーマンガを集中して描きはじめたのは，昭和20年以降，医専に入学してから――と絞り込むことができる。

第3章　手塚治虫 1994

1

1993年以降，マンガをめぐる状況はどのようになっているか。手塚治虫に関わることも含め，次の三つの大きな動きを指摘しておこう。

マンガ文庫本の隆盛，「謎本」ブームとマンガ評論書の相次ぐ出版である。

(1)　第1章でマンガ作品の文庫化に伴い，解説の点検をしたが，1992年の文春文庫『アドルフに告ぐ』に端を発した手塚作品の文庫化は，秋田文庫『ブラック・ジャック』が大ヒットしたのが起爆剤になったのか，手塚作品に限らず，他のマンガ作品をも多数，競って文庫化して出版させることになり，20年ほど前のマンガ文庫ブームを再現し，それは今もなお続いている。最近のマンガに飽き足りない，より高い年齢層をターゲットにして作品の選択をしているようでもあり，なおこの傾向は続くものと思われる。多くの作

品が刊行されるに従い，今では容易に入手できない作品をも文庫本として読むことができるというのは利点だが，マンガをできうる限り雑誌初出のオリジナルに近い大きな判型で読みたいという立場からいえば，喜ばしいブームとも言い切れない。細かに描き込まれた作品は甚しく読み辛い。文庫化できない作品もあるだろう。

因みに，『ブラック・ジャック』がよく売れたのは結構なことだが，その読まれ方に私はやや危惧の念を持っている。前稿でも触れたことだが，手塚治虫はその本質に危険な一面を内包しているマンガ家で，作品にそれが顕れていることがしばしばある。『ブラック・ジャック』もその一例で，危険なマンガになりうるのだ。前稿でも引用した桜井哲夫氏の『ブラック・ジャック』観は以下のようなものであった。「この物語は，臓器移植，人工授精などの先進的な医療革命の現実をふまえながら，医師が，患者にとって，さながら全能の魔術師のごとき存在へと変貌をとげた近代医学への批判を物語の根底においている。」[10] そのとおりだ。しかし，何と生真面目な読み方なのだろう。『ブラック・ジャック』は何よりもエンターテインメントとして面白い。マンガとして面白い。荒唐無稽なところが最も面白い。ところが，桜井氏のような生真面目な読み方をする読者が多くなっているらしい。『ブラック・ジャック』を読んで感動し，外科医を志したとかいう話をきいたことがある。オソロシイ。『ブラック・ジャック』のなかには桜井氏の文章にもかかわらず，人間を臓器の塊とみる人間観も多く見られるし，その面をマトモに受取る生真面目な読者もありそうだからだ。『ブラック・ジャック』がマンガであり，エンターテインメントであることを，そして『ブラック・ジャック』は危険なマンガでもあることを知った上なら，感動して外科医を志すのもいいだろう。しかし，何だかオソロシイ。

(2) 1992年に発行されベストセラーとなった『磯野家の謎』のあとを追って，類似のマンガ関連書が続々と刊行され，「謎本」と呼ばれるジャンルを形成するまでに至った。その殆どは，『磯野家の謎』と同じく，たいした

内容を持たないものばかりで，これは一時的なブームが過ぎて，今後も続きそうな気配はなくなったようだ。マンガ論のレベルをこれ以下はないところまで低下させた点で大きな貢献をしたとでも言うしかない不毛なブームだった。

手塚治虫関連では，『鉄腕アトムの秘密』（文化創作出版），『手塚治虫の真実と謎と秘密と履歴書』（山河社）が出ている[11]。後者は情報本と考えれば多少はましか。

(3) マンガ評論およびマンガ関連書を，主なものに限って列挙しておく。そのうちのいくつかについては，いずれ取り上げる予定である。

1993年

2月　中野晴行『手塚治虫と路地裏のマンガたち』（筑摩書房）

4月　丸山　昭『まんがのカンヅメ』（ほるぷ出版）

5月　吉弘幸介『マンガの現代史』（丸善）

6月　小野耕世『アジアのマンガ』（大修館書店）

8月　梶井　純『トキワ荘の時代』（筑摩書房）

1994年

3月　コミック表現の自由を守る会編『誌外戦』（創出版）

3月　清水　勲『漫画と小説のはざまで』（文芸春秋）

3月　長谷邦夫『ニッポン漫画家名鑑』（データハウス）

3月　蜂巣　敦『デビルマン論』（風塵社）

4月　中野晴行『手塚治虫のタカラヅカ』（筑摩書房）

7月　四方田犬彦『漫画原論』（筑摩書房）

8月　大塚英志『戦後まんがの表現空間』（法蔵館）

8月　『「来るべき世界」構想ノート』（手塚プロダクション）

9月　大塚英志『戦後民主主義の黄昏』（PHP）

11月　ジャクリーヌ・ベルント『マンガの国ニッポン』（花伝社）

12月　荒俣　宏『漫画と人生』（集英社文庫）

1995 年

2 月　手塚プロダクション・村上知彦編『手塚治虫がいなくなった日』（潮出版社）

2 月　手塚悦子『夫・手塚治虫とともに』（講談社）

3 月　長谷邦夫『ニッポン名作漫画名鑑』（データハウス）

3 月　大下英治『手塚治虫・ロマン大宇宙』（上）（下）（潮出版社）

4 月　竹内オサム『戦後マンガ 50 年史』（筑摩書房）

5 月　別冊宝島 EX『マンガの読み方』（宝島社）

6 月　夏目房之介『手塚治虫の冒険』（筑摩書房）

7 月　長谷邦夫『ニッポン漫画雑誌名鑑』（データハウス）

〔注〕

1)『宝塚市立手塚治虫記念館図録』(1995 年 4 月，宝塚市立手塚治虫記念館発行)，p. 2.

2) 1994，筑摩書房。

3) 筑摩書房。

4)『手塚治虫のタカラヅカ』，「はじめに」。

5) 同書，p. 93.

6) 同書，p. 96.

7) 講談社。

8)『まんだらけマンガ目録』⑧，1995 年 3 月，株式会社まんだらけ発行。

9) 年表には「1994 年 11 月作成」とある。

10)『手塚治虫』，1990，講談社，p. 176.

11) いずれも 1993 年発行。

(1995 年 7 月)